

来遠橋

ベトナム・ホイアン



ベトナム・2004年発行

ベトナム中部の町、ホイアンに日本人が架けたと伝えられる古い橋が残っています。正式名は来遠橋といい、現在は中国風のデザインの屋根付橋になっています。ホイアンは、ベトナム中部に栄えたチャンパ王国時代からの古い港町で、16世紀後期に広南阮氏の支配下に入っても、国際交易港として繁栄しました。

17世紀初め頃には日本からの貿易船が多数入港し、日本人町も作られ、数百人の日本人が住んでいたようですが、外国への渡航が禁止されてからは次第に減少してきました。そして当時の日本人町の位置も特定できていません。その後は中国人が町の経済活動を担うようになります。

ホイアンはトゥボン川の河口を利用した港によって繁栄してきましたが、土砂の堆積などにより19世紀になると大きな船の利用が減って、町の活力が失われていきました。その結果、古い町並みそのまま残されることになり、中心市街地が1999年に世界遺産に登録されました。

来遠橋は現在のメインストリート、チャンフー通りとグエンチミンカイ通りを結び、トゥボン川の小さな支流を渡っています。名前の由来は、18世紀初め頃、阮王朝

の王が日本人のことを思い、「遠くから来た友人」という意味で名付けたとも言われています。

橋の長さは15～16mほど、橋面の幅は5～6mほどで、4か所の石積橋脚で支えられています。中央径間はおそらく木桁が並べられているのでしょう。橋脚に見られる石やレンガを持ち送りで積んで空間を作る技術はチャンパのミーソン遺跡でも見られます。来遠橋の基本的な構造は、中国の影響によるものか、チャンパなどの伝統的な技術の応用なのか、決め手はなさそうです。類似の構造は日本にはなく、日本人の技術者がかかわったとは考えにくいようです。

橋の中央部に小さな寺が併設されていて、地元ではチュア・カウ、寺橋と呼ばれています。寺の本尊は北帝という北の方向を守り、水を司る道教の神のようです。橋の両側の壁には幸福と繁栄を象徴するブシュカンとザクロの彫刻があり、橋を守るように犬と猿の石像が置かれていて、中国風の思想と意匠を示しています。構造、デザインを含め、未解明な点が残されており、多角的な検討が必要でしょう。

